

新潟県リコーダー教育研究会 会報 H30-3号
平成30年11月22日(木) 発行



さえずり

会長 根津 江美子
(十日町市立西小学校 教頭)

大きな役割を果たしてきた新潟県リコーダーコンテスト

… フェスティバル部門にも期待 …

顧問 皆川 昌雄

昨日、三条東公民館で「花いっぱい音色に包まれて」と題する古楽コンサートがあり、足を運びました。リコーダー奏者のM氏のチラシ裏に記載されたプロフィール欄に「小学時、皆川昌雄氏からリコーダー演奏の楽しさを教わり……」の文を見つけ、なつかしさに思わず笑みがこぼれました。三条旭小学校で担任し、昭和50年の第1回新潟県リコーダーコンテストに出場して、最優秀賞を得たメンバーの一人です。(今年のコンテストは第44回) 当時はリコーダー部などは勿論なく、普通の音楽の授業のなかでリコーダーに興味をもった子どもたちが、昼休みや放課後など、集まってアンサンブルをしていたものでした。そんなアンサンブルに発表の場を提供し、目標を与えたのが、当会のコンテストでした。その後、私は、条南小学校・見附小学校と転勤し、そのたびにリコーダー部を創設・担当してきました。そんなことができたのは、ひとえに当会のコンテストあつてのことだと思います。正式のクラブ活動や部活動と違い、任意のアンサンブルを楽しむ子どもたちにとって、コンテストのような発表の場と目標があることが、活動の継続・活性化や演奏レベルの向上等にとってどんなに有効であるかは言うまでもないところです。そして、それに類似したことが、県内のいろいろな学校でおきていたのだと思います。「子どもたちも一生懸命だし、来年から正式にリコーダー部ということで校務分掌上にも位置付けよう。君もミニバス部とのかけもちでなく放課後はリコーダー部の指導に専念してよい。」条南小の当時の校長に言われたときは、うれしかったことを覚えています。



子どもたちにリコーダーの楽しさ・素晴らしさを教え、生涯にわたってリコーダーや音楽を愛する人たちを育てることが、私たち新潟県リコーダー教育研究会の変わらぬ願いです。当会のコンテストはその意味でも、大きな役割を果たしてきたと言えるでしょう。今年のコンテストは第44回を迎えます。毎年の勤務校の業務の合間をぬってのコンテストのお仕事、本当にご苦労様です。担当している会員諸氏のがんばりに心から拍手を送りたいと思います。

また、今年からコンテストにフェスティバル部門が創設されました。コンテストの出場が常

連校にかたよりすぎる傾向を心配し、(かつての私がそうであったように)初めての学校、初めてのグループも比較的気軽に出場できるようにならないものかと考えていたので、大きな前進だと思います。この部門の今後の発展にも期待し、注目したいと考えています。

(h30, 11, 19)



紫雲寺中学校音楽部 訪問記

編集担当

昨年度も全日本リコーダーコンテストに出場され、合奏・重奏とも優秀な成績を収められました紫雲寺中学校音楽部さん。どのような部活経営をされているのか興味をもちましたので見学をお願いしました。三浦由希子先生は快く受けてくださいました。

先生と生徒が大変アットホームな雰囲気の中で活動が行われているのに感動いたしました。音楽室に入ると生徒さん主体で進める基礎練習をしていました。以下は、活動でやられていたことや感想・印象、お聞きしたことをお伝えします。

【その時の基礎練習内容】

- ・ 部長が指示しながら進めている。プログラム1つ終わると、気付いたことを伝え、他の生徒は「はい」と応える。
- ・ 電子音のメトロノーム(ハーモニーディレクターに内蔵)のビートに合わせて行っている。アンプで増幅し明確に打拍音が聴こえるので拍の意識ができる。合奏指導の場面でも活用している。
- ・ 半音階のスケールを平行5度で(S管・F管、同一の指使い)
- ・ ルネッサンス舞曲(4声)を、たっぷり息を流しながら、レガートでしっかり歌い、きれいにハモリ合っている。
- ・ 単旋律曲集から、部長が指示(日によって替わる)した曲を、平行5度で。



【合奏指導を拝見して ～ 楽しい雰囲気での音楽的な指導】

- ・ 合奏指導の開始時。昨日の反省を踏まえ今日のめあてを提示し、賛同を得て開始
- ・ 笑顔が見られ、気持ちの良いやり取りで進められ、温かい雰囲気、開放された雰囲気で練習が進められている。

- ・ 生徒と同じ目線で話し、冗談も交え、指導語は丁寧語。「～だと思いました。」「～してみましよう。」「～しておきましょう。」「～からやってもらっていいですか(^.^)」「注文が多くてね(^.^)」「2回やったら失格(^.^)」※笑顔の絵文字的な雰囲気です優しさがこもって。
- ・ やっている音楽が生き生きしているためか、先生も生徒も燃えている。
- ・ 「また間違えた」と気軽に言えている。(リラクゼーションの図られている練習雰囲気)
- ・ 先輩・後輩の垣根を払いたいと先生が言われる。楽譜を読める子が下級生にいて、上級生も教わっているいい関係。
- ・ 先生と生徒、二人三脚の姿勢で音楽を創り、生徒とともに向上して行こうとされている姿勢に敬服。
- ・ 「内部・外部のいろいろな人からの解釈・感じ方は、一旦受け入れ、どれが良いのか、取捨選択をして取り入れていきましょう。」と生徒に日頃から指導している。
- ・ 子どもたちの中に無いものは、教師から提示していく。
- ・ 先生は、演奏を聴いて敏感に感じ取り、判断して、どうしたら良いか、的確にアドバイスしている
- ・ できないリズムやフレーズは、テンポを落とし、(メトロノームを使い)何回も繰り返して。生徒のできなさ感やできた感の声を聞きながら、最終的にできた感を体感させていこうとされている。

【練習の音や演奏を聴いて】

- ・ (1回目の訪問の時、) 難しい曲をこなしているが難しがっていない。挑戦することを楽しみ合っているような感あり。譜読みを先にしている子の音を聴き取り、楽譜のどこの個所か見付け付いて行きながら、次第に乗って本意な気持ちになっていっているんだろうと推察させられた。
- ・ 演奏される響きや音楽は、ゆったり、たっぷり楽器が鳴り、生徒一人一人が伸び伸びと吹き、鳴っている音が素晴らしい。
- ・ 10/6に伺った時は、譜読みはでき、縦の和音も合い、8割完成している。

【アンサンブルグループの様子】

- ・ 4人とも主体的に、感じ合い、生き生きとした演奏。
- ・ グループのどのパートも歌うように演奏し、縦も合う集合音
- ・ グループのメンバーのつながりが温かく一体感が感じられる。

生徒さんたちは、楽しく集中して音楽活動をしている。三浦先生は、音楽指導者としての知見が広く、温かい生徒指導的配慮に基づく部活経営をされていた。

素晴らしい演奏、生き生きとした生徒さんと先生の指導に癒され、心地良く帰路に着いた。



オリジナルリコーダーが教えてくれた、

音楽的な表現のヒント

リコーダー奏者 太田光子

新潟県リコーダー教育研究会のみなさま、こんにちは。
今回は、普段とは全く違うアプローチで音楽的な変化をつけることになった、私自身の最新の経験をお話したいと思います。リコーダーで音楽的な表現をするために、こういう方法もある、という一例として、僅かながらご参考になればと存じます。



今年の9月28日に、私がリコーダーを教えている音楽大学・上野学園大学で、オリジナルのリコーダーによるコンサートが行なわれました。

大学所蔵のオリジナルリコーダーは、こちらの4本です。

- ・ **ブレッサン**(F管アルト, ロンドン, 18世紀初期)
- ・ **スーク**(D管ヴォイス・フルート, 製作地不詳, 18世紀初期)
- ・ **ハカ**(C管テノール, アムステルダム, 17世紀末期)
- ・ **作者不詳**(ソプラノ)

いずれも、**リコーダーが大変活躍していたバロック時代に作られたオリジナルリコーダー**です。

ブレッサンを使用し、ヘンデルのリコーダーソナタハ長調 HWV365 を演奏しました。この曲は大変有名なので、ご存知の方も多いかと思います。



ブレッサンは、イギリスで活躍していた管楽器製作家です。ヘンデルも同時代同じ場所で名を馳せていた音楽家です。当時のロンドンで、ブレッサンのリコーダーを使用してヘンデルのリコーダーソナタが演奏されたことは、想像に難くないでしょう。

私のブレッサンは、6,7穴がダブルホールでモダンフィンガリング、つまり、今現在多く使われている、普通のリコーダーの運指(イギリス式運指)です。どの音の音色もある程度バランスがとれています。それに対し、今回使用したオリジナルのブレッサンは、**シングルホールでヒ**

ストリカルフィンガリング（または**オールドフィンガリング**。当時のリコーダーの運指のこと）。**音によってさまざまなカラーを持っています**。その大きな違いを始めとして、楽器の持つ特徴がそのまま音楽づくりに反映されることを実感し、大変興味深かったです。

その一例を挙げたいと思います。

第1楽章の13小節目から、タイで同じ音が小節をまたいでつながっているパターンが4回あります。

The image shows a musical score for a recorder, consisting of two systems of staves. The first system has a treble clef staff with a key signature of one sharp (F#) and a bass clef staff. The second system also has a treble clef staff with a key signature of one sharp and a bass clef staff. Four specific notes are highlighted with numbered boxes: 1 (a C-sharp note), 2 (a D note), 3 (a B note), and 4 (a B-flat note). Below the staves, there are detailed fingering diagrams for each of these notes, showing finger positions on the holes and any necessary adjustments like half-holing or breath control. The diagrams use numbers 1-5 for fingers and asterisks for half-holing. Some diagrams also include 'st' for breath control or 't.' for tongue placement.

①シの音は第6穴に少し指をかぶせるため、自然と少し陰ったような柔らかい音色になります。

②ドは安定しているのでのびのびたっぷり吹けます。

③シ♭の運指は、①と同じように6の指孔がシングルホールで、開け具合を自分でコントロールするため音程を取るのがなかなか困難、音色もかなりデリケートになります。

④ラ♭は、転調の調性の方向を決めるキーワードとなる音で、この楽器では確かな説得力を持って表現できたのが、大きな収穫でした（この箇所は、和音の移り変わりの緊張感を感じつつも、私は普段は逆に繊細な雰囲気演奏していました！）。

普段リコーダーと対峙する時、音それぞれに特徴がありすぎると「ばらつきがある、吹きにくい楽器」と敬遠してしまいがちなのですが、その「ばらつき」が**楽器の主張としてそのまま音楽になり、楽器にとって無理のない、自然な音楽的表現につながって**いきました。

これまで私は、曲の中で起きている事柄を見ながら音楽的な変化をつけていました。もちろんそれが基本なのですが、そうやって楽譜を見て頭で考えてこねくり回していたものが、**楽器の言うことを聞いて演奏するだけで音楽になっていく、とても面白い経験**でした。

来月のコンサートで、この曲を自分の楽器で演奏する予定です。オリジナルブレッサンの教えてくれた音色のカラーが、今後音楽的な表現をするのに大いに参考になりそうです。

【編集】 太田先生から解説いただきました。運指(指づかい)について、様々な言葉がありますが、現在は以下のように認識がされているようです。①バロック式運指＝イギリス式運指。

②ヒストリカルフィンガリング＝オールドフィンガリング。①と②は違いがある。



<<編集後記>>

巻頭言は皆川顧問から執筆いただきました。今年度、コンテストはフェスティバル部門を設け、改革の年を迎えます。曾て、音楽授業で育てられた教え子さんが生涯音楽として演奏活動をされているというのは、素晴らしいですね。子どもたちの心に響く音楽授業をされていたからこそでしょうね。

紫雲寺中学校音楽部の訪問では、様々学ばせていただくことができました。音楽授業・音楽部指導に携わっている先生方の参考になる実践をされていると思います。現役の先生方、三浦先生と連絡を取って、直接お聞きするのは如何ですか？きっと優しく教えてくださいと思います。

太田光子先生からは、身近に触れる機会の少ないオリジナルリコーダーから、音楽的な表現のヒントを得られたというお話。オリジナルリコーダーを私も1本購入をしてみたいなという思いが沸きました。私の手元にある木管、プラスチック製ですらメーカーによって個性が違います。その楽器の個性を引き出しながら吹くことに難しさも面白さもあります。私は、ここら辺の庭で遊んでいるのでしょね。(^_^) (樋熊)

投稿・問い合わせ、お待ちしております。 mitu3tu@gmail.com

広報誌「さえずり」は、既刊も含めて、新潟県リコーダー教育研究会HPにて見ることができます。

広報担当：樋熊三津男 / ホームページ：児玉禎明

